

2020.6.1 ↓ 2020.9.6	大宮図書館 開館一周年記念展示 与謝野晶子と大西民子 ～民子が憧れた歌人・与謝野晶子～	歌人・与謝野晶子の短冊等の自筆資料や、 民子が晶子について書いた自筆資料等を展示
2020.9.7 ↓ 2020.11.6	民子の日常	民子が「衣」「食」「住」について詠んだ歌の 自筆資料等を展示
2020.11.7 ↓ 2021.1.6	詩人・宮澤章二と大宮	さいたま市ゆかりの詩人・宮澤章二が 大宮を題材にして作った詩の自筆資料等を展示
2021.1.7 ↓ 2021.2.23	民子の心を支えたもの —奈良・寺・仏—	民子が青春時代を過ごした奈良から、 仏や寺を題材に詠んだ歌の自筆資料等を展示
2021.3.5 ↓ 2021.5.6	歌人・永井陽子 「うたはふしぎな楽器」	女流歌人・永井陽子の自筆色紙等を展示

# 全円の歌人 大西民子

—沖ななも先生と民子の歌をよむ—

2021年5月7日(金)～7月4日(日)

## 大宮図書館 館長からのひとこと

2021年5月7日、大宮図書館は開館2周年を迎えました。昨年は新型コロナウイルス感染症が世界中で猛威を振るい、新しい生活様式「ニューノーマル」として、人々の生活や価値観、考え方に大きな変化をもたらしています。大宮図書館も一時期休館を余儀なくされましたが、現在さまざまな感染防止策を行いながら開館しています。

文学資料コーナーでは大宮市(現・さいたま市)で活動をつづけた歌人、大西民子を中心に、さいたま市ゆかりの文学者たちに纏わる企画展を行っています。

感染症発生から1年以上たった現在もまだ収束は見えませんが、大宮図書館ではこれからも新しい学びや発見を提供する場であり続けていきます。



馬淵忠秀館長

イラスト：©仲佳

## 「全円の歌人 大西民子」参考文献

『自解100歌選 大西民子集』大西民子/著 牧羊社 1986年

『大西民子の歌(現代歌人の世界4)』沢口美美/著 雁書館 1992年

『青みさす雪のあけぼの-大西民子の歌と人生-』原山喜文/編 さきたま出版会 1995年

『まぼろしは見えなかった-大西民子随筆集-』さいたま市立大宮図書館/編 さいたま市教育委員会 2007年

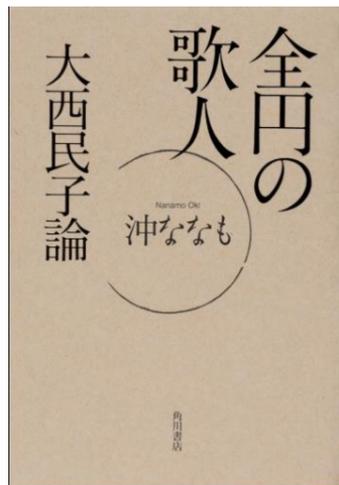
『全円の歌人-大西民子論-』沖ななも/著 角川文化振興財団 2020年

「短歌」1974年9月号

2021.5.7 発行  
さいたま市立大宮図書館  
さいたま市大宮区吉敷町1-124-1  
電話 048-643-3701

1	自筆短冊	「かたはらにおく幻の椅子一つあくがれて待つ夜もなし今は」
2	自筆原稿	「山の彼方に雲ゆく見れば訪ひがたきわがみどり児の墓辺思ほゆ」
3	日記	埼玉県立文化会館勤務時代の日記
4	自筆原稿	「死ぬことしか言はず蹠踏たる夫にいつまでも待つと告ぐる外なかりき」
5	自筆原稿	「夢のなかといへども髪をふりみだし人を追ひみきながく忘れず」
6	写真	万葉植物園の民子
7	自筆原稿	「石臼のずれてかさなりぬし不安よみがへりつつ遠きふるさと」
8	自筆原稿	「てのひらをくぼめて待てば青空の見えぬ傷より花こぼれ来る」
9	自筆短冊	「遠き雲の地図を探さむこの町をのがれむといふ妹のため」
10	書籍	第七歌集『風水』1981(昭和56)年刊行 沖積社 掲載歌「一本の木となりてあれゆさぶりに過ぎにしものを風と呼ぶべく」
11	所蔵品	埼玉県立図書館勤務時代の菅野民子(大西民子)名刺
12	雑誌	「短歌」1974(昭和49)年9月号 座談会「戦後女歌の軌跡」
13	自筆短冊	「桃の木は葉をけむらせて雨のなか共に見し日は花溢れみき」
14	書籍	第四歌集『花溢れみき』1971(昭和46)年刊行 短歌研究社
15	自筆短冊	「ともに見る人もあらねば桜の辺をいつときめぐりひとり戻り来」 沖ななも作/筆
16	書籍	『全円の歌人 大西民子論』沖ななも/著 2020(令和2)年刊行 角川文化振興財団
17	自筆原稿	「界限の子らみな育ち二十糶ほどなる雪のそのまましづか」
18	自筆原稿	「見つからざりし巻尺が今出でて来て一メートル五〇まで伸びて見す」
19	自筆原稿	「階段まで灯をともし待ちをればひとりぐらみは戻りて来ずや」
20	書籍	遺稿集『光たばねて』1998(平成10)年刊行 短歌新聞社 掲載歌「ひとと待つ側にのみ居て嘆きしかつらかりにけ待たる人も」
21	所蔵品	紫綬褒章
22	写真	自宅にて・晩年の民子

※所蔵はすべて大宮図書館です



『全円の歌人 大西民子論』(No.16)  
提供:KADOKAWA

## 『全円の歌人 大西民子論』 2020年9月 角川文化振興財団刊行

本書は、歌人・沖ななも先生が民子短歌の全貌に迫り、その作風を追求し論じた本です。

沖先生は茨城県古河市に生まれ、幼い頃浦和市に移り住みました。歌人・加藤克巳に入門して結社「個性」に加わり、第一歌集『衣裳哲学』は現代歌人協会賞と埼玉文芸賞を受賞しました。現在は「熾」の代表をつとめ、さいたま市を拠点に活動を続けています。

本書では、民子の遺した歌集を夫との不仲に悩んだ第一期、孤独にさいなまれつつも歌人として充実していた第二期、円熟味を増した晩年の第三期に分けて考察しています。今回の展示はそれを受けて、それぞれの時期に詠まれた民子の歌をご紹介します。

### 女としてのドラマが詰まった第一期

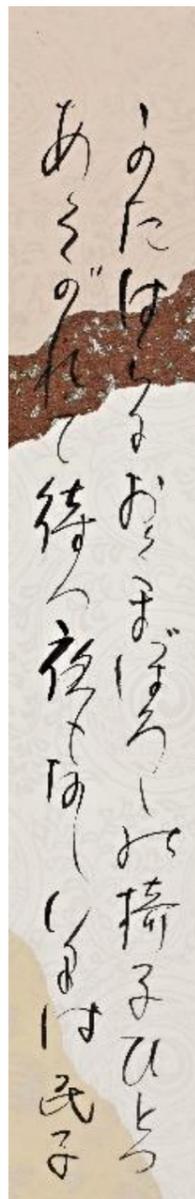
#### 『まぼろしの椅子』・『不文の掟』

民子の第一歌集『まぼろしの椅子』の大きなテーマは、夫を「待つ」ことでした。小説家志望だった同じ教員の大西博と結婚しましたが、翌年に我が子を死産で亡くします。その後、釜石市から大宮市に移り住んでからも、夫との仲違いと別居という困難な状況に置かれました。その様子をストレートに詠んだ歌は読者の同情を誘いつつ、同時に「帰らぬ夫を待つ妻」というイメージを民子に持たせることになりました。

好評を持って受け入れられた『まぼろしの椅子』ですが、刊行後周囲の歌人たちと交流する中で、民子はただ現実を歎いただけの歌で満足してはいけなさと考えるようになり、自分なりの工夫を模索するようになりました。

第二歌集『不文の掟』では、心情をありのままに詠むのではなく、風景や夢で心の傷や満たされない欲求を表現しようと試みています。

自筆短冊  
「かたはらにおく幻の椅子一つ  
あくがれて待つ夜もなし今は」(No.1)



### 孤の境地を確立した第二期

#### 『無数の耳』・『花溢れみき』・『雲の地図』・『野分の章』・『風水』

民子は長い間別居していた夫とついに離婚し、同居していた最後の肉親である妹・佐代子も亡くしてしまいました。すべてを失った民子はこの時期に人間の孤独を見つめた歌を詠みます。

身の回りでは不幸に見舞われた民子ですが、歌人としては最も充実した時期となり、比喻を駆使した多くの傑作を生み出しました。また、講演会等の講師として招請されたり、雑誌等からの執筆依頼も増えるなど、ただ自身が歌を詠むだけでなく、対外的な活動も多くなりました。

沖先生が、民子論を書くため大西宅を訪れたのは『雲の地図』(1975年)を刊行した後でした。桐単笥を見せながら、民子は「かつて同居していた姑のもの」と説明します。実際は姉の形見であり、沖先生は別れた夫を今も想っている女性というイメージを崩したくないのかもしれないと思いました。

### しっとり味わい深い第三期

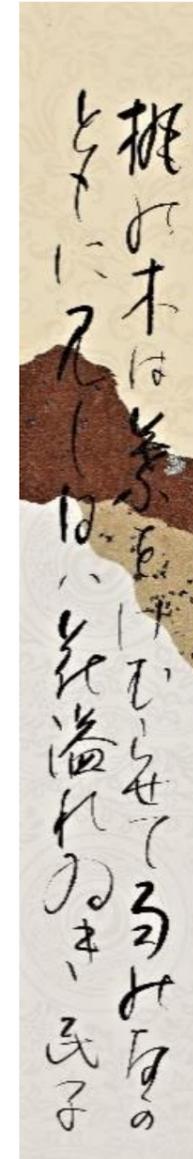
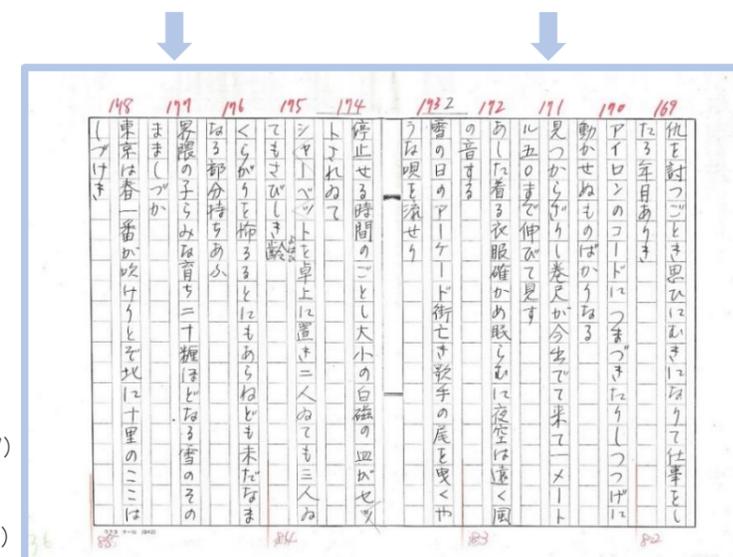
#### 『印度の果実』・『風の曼陀羅』・『光たばねて』

50代後半となり、民子は体調への不安から県立久喜図書館を最後に公務員の職を辞し、1983(昭和58)年には、民子が長年師事してきた歌人・木俣修が亡くなりました。一方で、長年の短歌界への貢献が認められて、1992(平成4)年に紫綬褒章を受章することになります。

62歳から亡くなるまでの民子の歌は、これまでとは違い穏やかな味わいのある歌が多くなっています。退職により身近なものを素材に選ぶことが多くなり、心臓病等による体調不良も影響していたのかもしれない。

また、これまでの困難な人生を振り返る歌も見られ、なかには夫や子供をテーマにした歌も詠んでいます。この時期になると、苦しかった過去の日々も素直に受け入れようになっていたのか、表現上の円熟味にもつながっているようです。

自筆原稿  
「界隈の子らみな育ち二十糶ほどなる雪のそのままづか」(No.17)  
「見つからざりし巻尺が今出でて来て  
一メートル五〇まで伸びて見す」(No.18)



自筆短冊  
「桃の木は葉をけむらせて雨のなか  
共に見し日は花溢れみき」(No.13)